

展覧会記録

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学史資料センター 公開日: 2015-04-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 阿部, 裕樹 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/17193

展覧会記録

阿部裕樹編

（1）「鯖江から近代を拓いた矢代操」展

主催 明治大学史資料センター

鯖江市まなべの館

（2）第38回明治大学中央図書館企画展示

「中田正子展

——明治大学が生んだ日本初の女性弁護士」

主催 明治大学図書館

明治大学史資料センター

鳥取市歴史博物館



矢代操



中田正子

以下は、二〇一〇年度に明治大学史資料センターが主催者の一員として開催した企画展（ただし小史展は除く）の記録である。

前半部は、「鯖江から近代を拓いた矢代操」展、後半部は「中田正子展——明治大学が生んだ日本初の女性弁護士」の記録である。いずれも、解説パネル等の執筆にあたった担当者名を冒頭に記し、当時の所属を（ ）で付した。ただし、執筆分担は記していない。また、本誌収録にあたって、算用数字を漢数字に改めた箇所がある。

また、明治大学史資料センターが二〇〇四年度から実施してきた「創立者出身地巡回展」についての総括は、本誌所収の鈴木秀幸「創立者出身地巡回展のいきさつと今後」を、「一読いただきたい」。

（1）「鯖江から近代を拓いた矢代操」展

まず、前半部は、二〇一〇年九月一八日（土）から、一〇月一〇日（日）まで、福井県鯖江市まなべの館において開催した「鯖江から近代を拓いた矢代操」展の記録である。同展覧会の主催者は明治大学史資料センターと鯖江市まなべの館である。

なお、展覧会会期中には、明治大学・鯖江市連携講座として「幕末維新期の鯖江藩と矢代操」と題した講演会（全二回）も実施されている。同講演会の明治大学の主管は社会連携事務室である。



鯖江市まなべの館



鯖江市まなべの館駐車場入口に設置された展覧会案内板

鈴木秀幸（明治大学調査役）
阿部裕樹（明治大学史資料センター）
竹内信夫（鯖江市教育委員会）

いあさやう

このたび、鯖江市まなべの館と明治大学史資料センターは共催により、鯖江出身で明治大学創立者の矢代操の展覧会を開催することとなりました。

矢代操は一八五二（嘉永五）年に鯖江藩士の家に生まれました。明治維新とともに藩の選拔生として上京。近代国家を担うべく、大学南校で最新・最高の学問を学びました。さらに司法官僚を養成する司法省法学校に転学し、フランス法に基づく法学の習得につとめました。

卒業後は法制官僚として元老院や貴族院等で立法事業に邁進しました。その傍ら講法学校等における教育経験を生かし、ついに明治法律学校（のちの明治大学）の創立に参画しました。一方、自ら研鑽に努め、法律学の教育に尽力しました。またその間、常に郷里・鯖江のことを想い、後進の育成をも忘れませんでした。

矢代操は、一八九一（明治二四）年にわずか三八歳にて早世されましたが、今なおその精神は継承されております。本展示によりその遺業を再認識するとともに、また鯖江市と明治大学の一層の交流の契機となれば幸いです。

二〇一〇（平成二二）年九月

鯖江市まなべの館

明治大学史資料センター

I 鯖江時代の矢代

(1) 鯖江藩

鯖江藩は、一七二〇（享保五）年の成立。若越（福井県）におかれた藩ではもともと新しい藩である。藩主は間部氏といい、初代藩主詮言以降九代継承し、廃藩置県を迎えている。所領は今立郡・丹生郡・大野郡で一三〇カ村余、石高は五万石であった。城下町は、武家屋敷地として北陸道をはさんで上新町、古町、寺町、下新町などを置いた。藩家臣団は士分（上士・中士・下士）、卒分に大別され、明治の資料によると士分三一軒、卒分三〇三軒とある。

間部家文書 鯖江市まなべの館所蔵

鯖江藩主間部家に伝来した史料群。国許鯖江の公用日記や江戸屋敷からの書状綴りである御用状、藩校蔵書などからなり、鯖江藩史研究に関する基本史料である。鯖江市指定文化財。

御家人明細帳 鯖江市萬慶寺所蔵

鯖江藩主間部家に仕えた矢代家の各代について、家督相続年月日・役職の変遷とその禄高、隠居年月日、没年などが記されている。但し、矢代操についての記載はみられない。

鯖江藩日記

松本美太（矢代操）が藩校新徳館の素読掛を命ぜられたことが記されているもので、美太が藩校の教官になったこ

とを示している。素読とは、文字だけを声を出して読む方法（慶応二年八月八日条）。

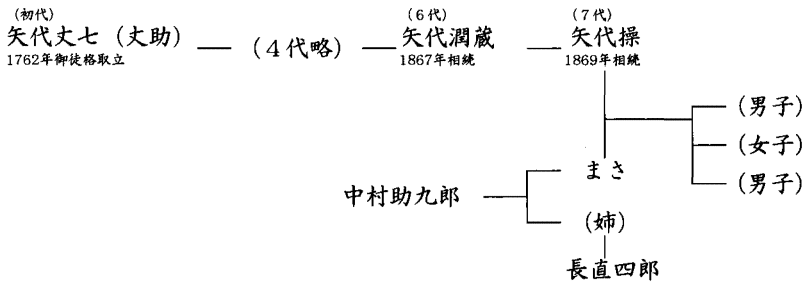
(2) 藩校進徳館

鯖江藩校進徳館は、一八一四（文化一二）年五月、六代藩主詮允が開設した「稽古所」がその前身である。稽古所では芥川玉潭（徹）を師範とし、儒学を中心とした教育が行なわれていた。一八四二（天保一三）年四月、七代藩主詮勝は稽古所を進徳館と改称し、規則や学規を改定するなど藩校の発展を図った。一八四六（弘化三）年の教師陣は、師役一名、斉長二名、世話人、素読掛であった。師役以外は生徒の中から選ばれていた。藩主が望んでの「直試」、重役が望んでの「考試」などの試験が行なわれていた。

進徳館蔵書（鯖江市まなべの館所蔵）

鯖江藩の藩校が「進徳館」で、その鯖江藩校進徳館で保管されていた蔵書類を総称して「進徳館蔵書」という。四書五経や歴史書の漢籍が中心で一部の図書には「進徳館蔵書」の蔵書印が押されている。

矢代操関係系図



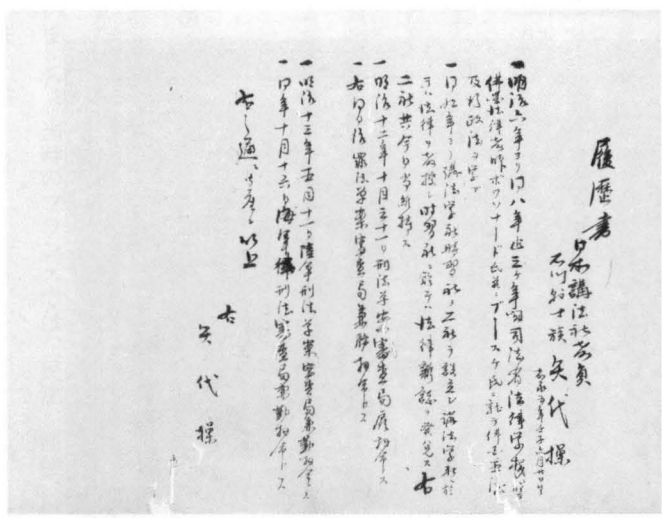
II 上京と遊学

一八七〇（明治三）年、矢代操は鯖江藩ただ一人の選拔生（貢進生）として東京に遊学。大学南校から司法省法学校へと転学します。この司法省法学校とは法制の整備等により、いち早く欧米列強並の一等国をめざすため、明治政府が設立したエリート官僚養成の学校です。

鯖江藩を背負って立つ矢代は病魔に冒されたこともありましたが、その激しく厳しい教育に耐え、全うしました。

貢進生

一八七〇（明治三）年、今後の国家運営を担うための人材発掘を企図した明治政府は、各藩に命じて若くて優秀な人材を、貢進生として大学南校（現在の東京大学）に入学させました。その人数として、一五万石以上の大藩で三名、五万石以上の中藩で二名、五万石未満で一名が割りあてられました。のちに明治法律学校を創立する岸本辰雄（鳥取藩）、宮城浩蔵（天童藩）、そして矢代操（鯖江藩）は、いずれも貢進生でした。

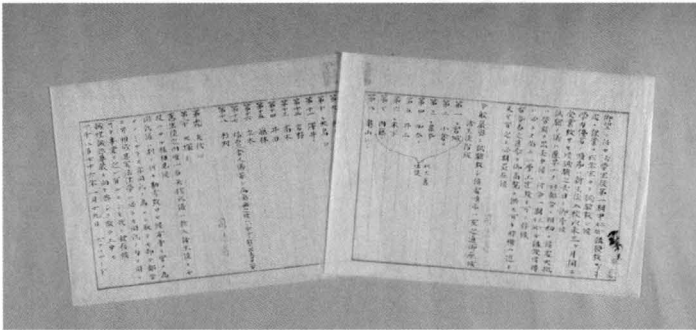


履歴書（1880年頃）

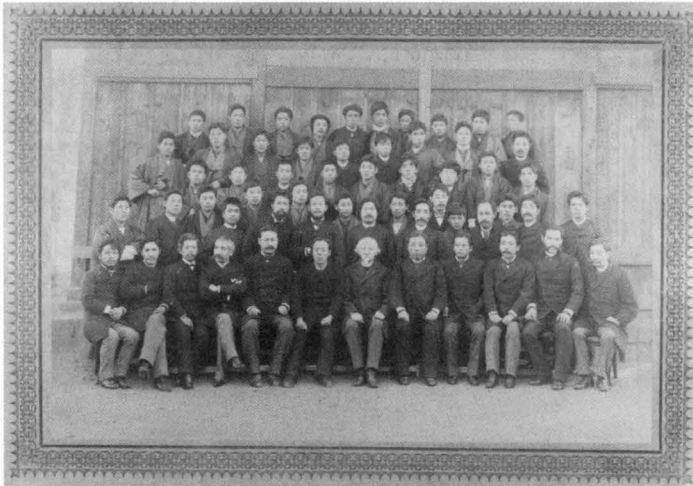
司法省法学校

司法省法学校の前身にあたる明法寮は、一八七一（明治四）年九月、法律家養成などを目的として司法省内に設立されました。明法寮は一八七五（明治八）年五月に廃止されますが、法律家養成機関は本省内に移り、司法省法学校と呼ばれました。

教師にはボワソナードらフランス人法学者があたり、最新の法学を講義しました。この法学校出身者には、のちに法曹界・政界等で活躍する人物が多数おり、現在では近代法学の母胎となったと評価されています。



成績上申書（1876年）



ボワソナードを囲んだ記念写真（明治期）

Ⅲ 立法事業 への参画

社会に出た矢代は元老院、さらに貴族院等々に就職。明日の日本を担うべく立法事業に当りました。



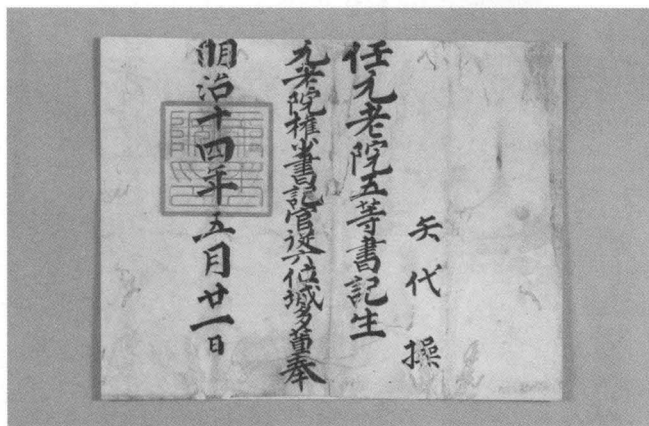
ボワソナード（明治期）

た。とりわけ矢代は貴衆両院の規則をはじめ立憲政治にとって重要な法案の起草や施行に尽力しましたが、その地道で真摯な勤務姿勢は高く評価されていました。そうした背景には学校卒業後も法学研究に刻苦勉励した、いわゆる目に見えぬ努力があつたからです。

フランス法学

明治維新によって近代国家へと生まれ変わった日本は、政治・経済・教育・文化など、さまざまな面で近代化を推進しました。

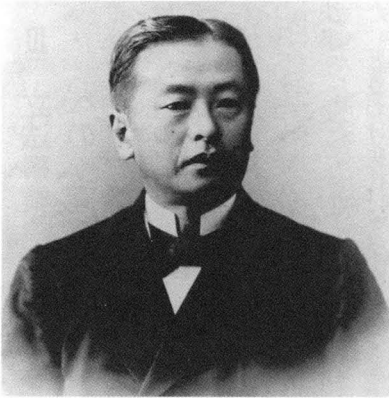
ただし、分野ごとに近代化の模範とすべき欧米先進国家は異なっており、国家運営の基礎となる憲法・法律の整備にあたっては、当初フランスをモデルとした法典編纂を企図していました。当時のフランスでは、民法、商法、民事訴訟法、刑法、治罪法からなる「ナポレオン法典」が採用されていました。



辞令（元老院、1881年）

ポワソナード Gustave Emil Boissonade de Fontarabie

一八二五（文政八）年、パリ郊外のバンセンヌ生まれ。パリ大学で古典学・法律学を修め、一八七三（明治六）年11月、日本人への法学教育と法典編纂のため来日しました。法学者の育成と、治罪法（のちの刑事訴訟法）、刑法、民法の編纂にあたりましたが、民法については、いわゆる民法典論争が起こって採用されませんでした。一八九五（明治二八）年の帰国に際し、勲一等瑞宝章を受章。一九一〇（明治四三）年没。



岸本辰雄



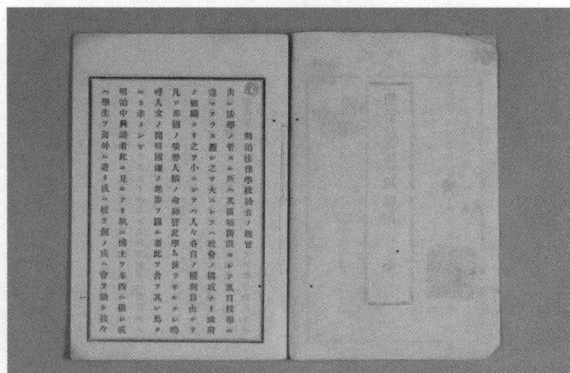
宮城浩蔵

IV 明治法律学校の 創立

司法省法学校卒業時における師・ボワソナードのことばである「日本人による日本人への法学教育」を使命としていた矢代は、卒業後、法律私塾・講法学校等の経営・教育に参画します。そしてついに一八八一（明治一四）年、東京数寄屋橋に専門学校として明治法律学校（のちの明治大学）を、司法省法学校時代の学友の岸本辰雄・宮城浩蔵とともに開校します。この時、矢代はわずか二八歳という若さでした。矢代は「教えることは学ぶことでもある」という教育精神により、得意とする民法を中心に、具体事例をあげながらわかりやすく、丁寧で熱心な指導が評判となりました。



開校当初の明治法律学校（想像図）



明治法律学校設立の趣旨

講法学会

矢代は、明治法律学校創立以前に、法律私塾・講法学会の運営に携わります。

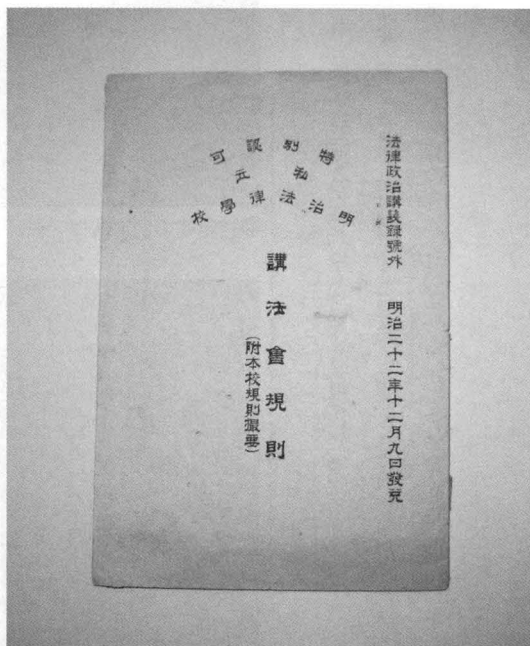
同社は、一八七六（明治九）年に北畠道竜によって開校されました。のちに出資者と学生の対立が起こり、学生らは当時教鞭を執っていた矢代・岸本辰雄・宮城浩蔵に新学校創立を願いました。矢代らがこれに応えたことよって、明治法律学校が開校することとなりました。

講法会

一八八〇年代後半は、大日本帝国憲法の発布と国会開設を控え、一方で現在の司法試験の内容が大きく変化した時期でもあり、法学への需要が拡大した時期でした。

明治法律学校は、そのような需要を受け、一八八七（明治二〇）年一〇月に、現在で言う通信教育担当機関として講法会を設立しました。同会ではテキストとして講義録を次々に刊行しました。

一八九七（明治三〇）年、講法会は明治法律学校出版会となり、講義録にとどまらず専門書の刊行も担うこととなりました。



講法会規則（1889年）

V 周辺との 交流

矢代は司法省法学校
以来の学友の間では、
常にリーダー的な存在
でした。それだけでは
なく、司法界では異な
る立場・考え方の人達
とも進んで交流につと
めました。

また地域における後進の育成にも尽力。鯖江の人々の間では「東京に
行ったなら、矢代の家を訪問せよ」とまで言い伝えられるほどでした。

長直四郎と常平社

矢代には、公私にわたり、非常に幅広い交友関係がありました。

その交友関係のひとつの拠点が、神田橋（現在の東京都千代田区内）近くで営まれていた常平社という仕出し屋（料理屋）です。経営者は矢代の妻「まさ」の父・中村助九郎です。

また、「まさ」の姉は長直四郎（おさ・なおしろう）という人物に嫁ぎます。その関係もあり、長は開校当初の明



長直四郎



記念写真（1884年）

治法律学校へ資金援助を惜しみませんでした。

剣山

一八八四（明治一七）年の記念写真を見ると、中列左端に矢代を確認できます。矢代は、西園寺公望（同列左から三人目）や宮城浩蔵（同列右から三人目）と比べると、身長も高く体格も立派に見えます。

矢代の身長・体重は不明ですが、明治時代の大関「剣山」（身長一七七cm・体重二二〇kg）と体格比べをしたと伝えられていますから、そのほどがうかがえます。



矢代操胸像・明治大学駿河台キャンパス



矢代操胸像・鯖江市まなべの館

VI 矢代操の継承

矢代が明治法律学校の設立趣旨に掲げた「権利自由」、「同心協力」はその後、明治大学の建学の精神として、今日まで脈々と受け継がれてきました。

そして、その偉業を顕彰して二〇〇一（平成一三）年には明治大学に、二〇〇三（同一五）年には鯖江市にと、双方に矢代操胸像が建立されました。鯖江に生まれ育ち、東京・明治大学で活躍した矢代の精神・思想は今後も継承されていくことでしょう。

矢代操の民法論の特色

著書からみる矢代の民法論の特色として、①得意とするフランス民法と当時の日本民法を比較しながら説明している点、②条文の解釈に柔軟性が見られる点、③自己の見解をまじえながら、簡潔・丁寧の説明する点などを指摘できます。

特に③の背景には、師・ボワソナードの「日本人による日本人への法学教育」という教えがありました。同志・岸本辰雄も、矢代を「日本人ニシテ日本人ニ向テ法律学ヲ教授」した最初の人物と評しています。

矢代操の主な著作

矢代操は研究者・教育者として、法学関係の啓発書や講義録などを著しています。代表的なものに『仏国民法財産相続表』（一八七七年）、『日本刑法講義』（一八八一年）、があります。それら著作のうち、『仏国民法講義』（一八八八年）は、明治大学創立一〇〇周年に際し復刻・刊行されています。

鯖江市街地実測図

明治九年一二月、地租改正の折に作成された絵図である。この絵図で特筆されることは、土地一筆ごとに、土地の番号、面積、所有者氏名が記載されていることである。この時点では、旧鯖江藩士の名も多く見える。本図は廃藩置県からおよそ五年を経た明治九年における旧鯖江城下の都市景観を示すものとして貴重な資料といえる。矢代操の居宅は面積二五歩とある。

矢代操略年譜

- 1852 (嘉永5) 年 鯖江藩士松本伝吾の3男として誕生
- 1861 (文久元) 年 藩校進徳館入学
- 1869 (明治2) 年 鯖江藩士矢代潤蔵の養子となる
- 1870 (明治3) 年 貢進生として上京、大学南校入学
- 1874 (明治7) 年 明法寮(のちの司法省法学校)入学
- 1876 (明治9) 年 法律私塾・講法学社の経営・教育に参画
- 1881 (明治14) 年 明治法律学校(現、明治大学)創立
- 1884 (明治17) 年 法律学士号取得
- 1886 (明治19) 年 元老院書記官
- 1890 (明治23) 年 貴族院書記官・同議事課長
- 1891 (明治24) 年 死去

- 2001 (平成13) 年 明治大学に矢代操胸像建立
- 2003 (平成15) 年 鯖江市に矢代操胸像建立



第38回 明治大学中央図書館企画展示

中田正子展

— 明治大学が生んだ日本初の女性弁護士 —

2010年 2011年
10月16日[土]~1月28日[金]

休館日: 10/29、11/1、11/30、12/29~1/4

明治大学中央図書館1Fギャラリー
(駿河台キャンパスリハビリタワー内)

開館・閉館時間は曜日によって異なります。詳細はホームページにてご確認ください。



お問い合わせ

明治大学図書館

<http://www.lib.meiji.ac.jp>

TEL:03-3296-4252(中央図書館)

主催: 明治大学中央図書館 明治大学史資料センター 鳥取市歴史博物館

後援: 明治大学法学部 明治大学情報コミュニケーション学部シエンターセンター 明治大学法科大学院 日本女性法律家協会 鳥取県弁護士会

（2）「中田正子展——明治大学が生んだ日本初の女性弁護士」

阿部裕樹（明治大学史資料センター）

続いて後半部は、二〇一〇年一〇月一六日（土）から、二〇一一年一月二八日（金）まで、明治大学中央図書館ギャラリーにおいて開催した「中田正子展——明治大学が生んだ日本初の女性弁護士」の記録である。

本誌収録にあたっては、展示パネルおよび資料の一部を収録した。原稿については展覧会パンフレットを、展示資料の全容については稿末の「展示リスト」をご覧いただきたい。なお、算用数字は漢数字に改めた。

また、テキスト作成にあたっては、鳥取市歴史博物館『日本初の女性弁護士 中田正子』（二〇〇六年）から多くを参照、引用している。あらかじめお断りしておきたい。

なお、展覧会会期中には、明治大学・鳥取県連携講座（後援・鳥取市歴史博物館）として「鳥取県と明治大学——日本初の女性弁護士中田正子と明治大学創立者岸本辰雄」と題した講演会（全四回、下記）も実施されている。同講演会の明治大学の主管は社会連携事務室である。

「鳥取県と明治大学——日本初の女性弁護士中田正子と明治大学創立者岸本辰雄」

第一回 明治大学出身 鳥取で活躍した日本初の女性弁護士・中田正子

講師 山泉 進（明治大学副学長、同法学部教授、明治大学史資料センター副所長）

奥村寧子（鳥取市歴史博物館学芸員）

第二回 明治大学専門部女子部の誕生

講師 長沼秀明（明治大学文学部兼任講師、明治大学史資料センター研究調査員）

第三回 鳥取出身の明治大学創立者・岸本辰雄

講師 村上一博（明治大学法学部教授、明治大学史資料センター運営委員）

第四回 自主・自立を胸に法の扉を叩き続けた女性法律家のあゆみを語る

講師 横溝正子（弁護士）

いじめ

本展覧会でとりあげます中田（旧姓田中）正子弁護士（一九一〇—二〇〇二）は、日本初の女性弁護士のひとりとして知られています。

中田正子弁護士は、一九一〇（明治四三）年一二月に現在の東京都文京区に生まれました。府立第二高等女学校、女子経済専門学校、日本大学選科生を経て、一九三四（昭和九）年に明治大学専門部女子部三年次に編入学しました。女子部卒業後は明治大学法学部に進学し勉強に励んだ結果、同窓である久米愛・三淵嘉子両氏とともに、一九三八（昭和一三）年に高等文官司法科試験を突破し女性弁護士の扉を初めて開くこととなりました。

その後、中田弁護士は、一九四五（昭和二〇）年に夫の郷里である鳥取県に移り住みます。その五年後には、鳥取市内に中田正子法律事務所を開業し、長きにわたり弁護士として活動しました。鳥取県弁護士会会長（女性初）、日本弁護士連合会理事（女性初）などの要職を歴任し、勲四等瑞宝章などを受章するなど、数多くの功績を残しています。

また、日本初の女性弁護士を養成した明治大学専門部女子部・同法学部についても述べておかなければなりません。ご存知のように、明治大学は一八八一（明治一四）年一月に明治法律学校として開校以来、数多くの法曹を輩出してきました。大正デモクラシーの時代を経て、徐々に女性の社会進出が要請され始めた昭和初期、明治大学は時代に先駆けて専門部女子部を設置し、学部と同じ教員が最新の法学や経済学を講義しました。この女子部が、日本初の女性弁護士誕生の大きな背景であったことは言うまでもありません。

戦後公布された日本国憲法により、法制上は男女平等となりました。現在では女性法曹も珍しくありません。しかし、中田弁護士のような先人の活躍があればこそ、後進の道が開かれていることを忘れてはなりません。

最後になりましたが、貴重な資料をご提供くださるとともに、多くのご助言・ご援助を賜りました中田弁護士のご家族の皆さまをはじめ、関係各位に厚く御礼申し上げます。

二〇一〇年一〇月

明治大学図書館 明治大学史資料センター 鳥取市歴史博物館



中田正子



中田正子

生い立ち

中田（旧姓田中）正子は、一九一〇（明治四三）年二月一日、現在の東京都文京区に生まれました。一九二三（大正一二）年に女子師範付属小学校（現、文京区竹早小学校）を、一九二八（昭和三）年に東京府立第二高等女学校（現、都立竹早高等学校）を卒業、その後、新渡戸稲造が校長を務めていた女子経済専門学校（現、新渡戸文化学園）に進学します。同校では、新渡戸をはじめ吉野作造（政治学）や我妻栄（法律）らに学びました。一九三二（昭和六）年、女子経済専門学校を卒業しましたが、「もっと学問がしてみたい」と考えるようになっていました。

新渡戸稲造（一八六二—一九三三）

五千円の肖像として知られる新渡戸稲造は、農学者、クリスチャンとして知られています。一九〇〇（明治三三）年に英文で執筆された『武士道』は各国語に翻訳されベストセラーになりました。

また、一九二八（昭和三）年に女子経済専門学校初代校長に就任しました。

我妻 栄（一八九七—一九七三）

女子経済専門学校で中田正子に法学を教えた我妻栄は、東京帝国大学法学部出身で、東京大学教授や貴族院議員などを歴任、一九六四（昭和三九）年には文化勲章を受章している、たいへん著名な民法学者です。



女学校時代の中田正子（1928年頃）



女子経済専門学校時代の中田正子（1932年頃）

明治大学入学

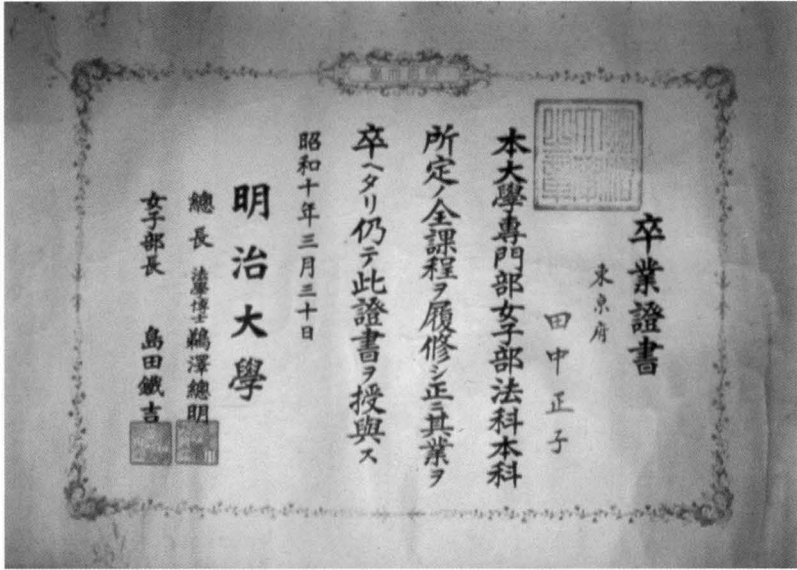
中田正子が女子経済専門学校を卒業した時代、女性の大学進学の際は、一般的には閉ざされていました。

彼女は日本大学法学部の選科生となり、一九三四（昭和九）年にその課程を修了しますが、正式な学部卒業生ではありませんでした。

一方、一九二九（昭和四）年、明治大学に専門部女子部が設立されました。同部の卒業生には明治大学の学部入学資格が与えられていました。すでに日本大学で法学を修めていた中田正子は、同大の課程修了後、明治大学専門部女子部三年次に編入学し、翌年の女子部卒業とともに明治大学法学部に進学しました。



3代目（旧）記念館（1931年）



専門部女子部卒業証書（1935年）



明治大学女子部の学友たち（1934年）

試験突破

一九三七（昭和一二）年、中田正子は女性で初めて高等文官司法科試験の論述試験に合格しました。しかし、この年は口述試験で不合格となりました。再チャレンジとなった翌一九三八（昭和一三）年の試験では、見事に論述・口述試験とも突破し、久米愛、三淵（旧姓武藤）嘉子とともに女性初の合格者となりました。三名はいずれも明治大学専門部女子部・同法学部出身者でした。

これにより、日本初の女性弁護士誕生が現実味を帯びることとなりました。



高等文官司法科試験合格祝賀会（1938年）

女性弁護士、誕生

一九四〇（昭和一五）年、中田正子は弁護士試験補試験に合格、東京・丸の内にあった岩田宙造（元司法大臣）法律事務所に所属し、弁護士としてのキャリアをスタートさせました。彼女はのちに「弁護士となった」当時は法律そのものが男女不平等であり、一般の意識は男女平等に程遠いものであったのに、このような岩田先生並に岩田事務所の雰囲気はありがたいものだった」と述懐しています。

また一方で、「女性を護りたい」という使命感から、雑誌『主婦之友』の法律相談や、明治大学専門部女子部の婦人法律相談所で、女性の相談者を対象とした仕事にも従事しました。



弁護士開業当初の中田正子（昭和10年代なかば）

妻として、母として

試補修習中であった一九三九（昭和一四）年、中田正子は鳥取県出身の中田吉雄と結婚しました。

一九四五（昭和二〇）年、中田正子は鳥取県で療養していた吉雄のもとに疎開することになりました。東京での弁護士生活が軌道に乗り始めた矢先のこと、たいへん大きな決断でした。

戦後、吉雄は鳥取県会議員から参議院議員と政治家の途を進みました。彼女も生活の基盤を鳥取県に置くことを決意し、政治家の妻として夫を支え続けました。また、彼女は子ども・孫にも恵まれました。彼女の日記や子ども・孫に宛てた手紙からは、子どもや孫の成長を喜ぶようすがうかがえます。



家族写真（国会前）（1957年）

中田正子法律事務所

一九四八（昭和二三）年、中田正子は鳥取県弁護士会に所属しました。当初は夫・吉雄の郷里である若狭町を中心に弁護士として活動しました。

一九五〇（昭和二五）年、中田正子は鳥取市馬場町に「中田正子法律事務所」を開業し、拠点を移しました。ちなみに、事務所の場所はかつて武家屋敷が立ち並んでいた地域で、明治大学創立者・岸本辰雄の生家にも程近いところです。

事務所内には、法律関係の書籍や書類、人権問題や裁判問題のスクラップ記事が山のように積まれており、彼女の熱心な研究姿勢の一端がうかがえます。



事務所内で（1991年）

功勞者

中田正子が生まれ、前半生を過ごした明治末期から昭和戦前期は、法制的にも社会的にも男尊女卑の時代でした。

そのなかにあつて、彼女は明治大学専門部女子部入学をきっかけに弁護士への途をまい進しました。どのような分野であつても開拓者の苦勞は並大抵ではありませんが、「おしつけの男女平等論を叫ぶより、自分の生き方を全うする方が重要」と、仕事に励んだそうです。

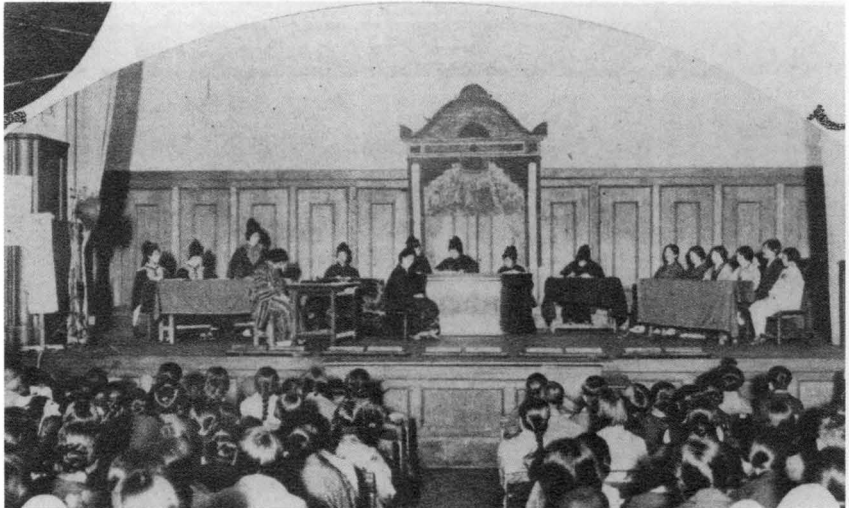
後年、彼女の弁護士としての活動は、大きな評価を受けました。鳥取県弁護士会会長、日本弁護士連合会理事（一九六九年、いずれも女性初）就任をはじめ、おもに鳥取県内で要職を歴任しました。また、藍綬褒章（一九七四年）、勲四等瑞宝章（一九八一年）も受章しました。



叙勲記念写真（1981年）



女子部校舎（1929年）



女子部模擬裁判（1931年）

「中田正子展—明治大学が生んだ日本初の女性弁護士—」関係年表

年	年齢	出来事
1881年	明治14年	明治法律学校（明治大学の前身）創立（1月）
1903年	明治36年	専門学校令に基づいて「明治大学」と改称
1910年	明治43年	0 中田正子誕生（現在の東京都文京区、12月）
1920年	大正9年	10 大学令に基づく明治大学認可（2月） 明治大学校歌公示
1923年	大正12年	13 東京府立第二高等女学校入学（4月）
1928年	昭和3年	18 女子経済専門学校入学（4月）
1929年	昭和4年	19 明治大学専門部女子部開校
1931年	昭和6年	21 日本大学法学部に選科生として入学（4月）
1934年	昭和9年	24 日本大学法学部選科生の課程を卒業 明治大学専門部女子部3年次に編入学
1935年	昭和10年	25 明治大学専門部女子部卒業（3月）、同法学部に進学
1937年	昭和12年	27 高等文官司法科試験の筆記試験のみ合格（女性初）
1938年	昭和13年	28 高等文官司法科試験に合格（女性初）
1939年	昭和14年	29 弁護士試補修習が始まる 中田吉雄と結婚
1940年	昭和15年	30 弁護士試補試験合格、正式に弁護士となる（女性初） 第一東京弁護士会に登録（7月） （この年）『主婦之友』に法律相談記事連載開始、明治大学専門部女子部「婦人法律相談所」で法律相談担当
1941年	昭和16年	31 太平洋戦争開戦
1944年	昭和19年	34 明治大学専門部女子部が明治女子専門学校となる
1945年	昭和20年	35 鳥取県八頭郡若桜町に移住（4月） 終戦（8月）
1946年	昭和21年	36 長女誕生（10月）
1948年	昭和23年	38 鳥取県弁護士会に入会
1949年	昭和24年	39 次女誕生（1月） 新制明治大学発足 日本弁護士連合会発足
1950年	昭和25年	40 明治大学短期大学発足（明治女子専門学校等の後身） 鳥取市内に「中田正子法律事務所」開業
1951年	昭和26年	41 長男誕生（3月）
1952年	昭和27年	42 鳥取家庭裁判所調停員就任
1969年	昭和44年	59 鳥取県弁護士会会長就任（女性初） 日本弁護士連合会理事就任（女性初）
1974年	昭和49年	64 藍綬褒章受章
1981年	昭和56年	71 勲四等瑞宝章受章
1985年	昭和60年	75 夫・中田吉雄死去
1986年	昭和61年	76 労働相から鳥取機会均等調停委員嘱
2002年	平成14年	92 死去（10月）

（参考文献）『明治大学小史』（学文社、2010年）、『日本初の女性弁護士中田正子』（鳥取市歴史博物館、2006年）

（注）年齢はその年に迎える満年齢

1938年(昭和13)年11月2日 東京日日新聞
 「女弁護士初めて誕生 喜びの三人 中に皇軍勇士の夫人も」

女弁護士初めて誕生

喜びの三人 中に皇軍勇士の夫人も



「女弁護士初めて誕生」の報に、皇軍勇士の夫人も喜びの一人として登場した。彼女の名は、中田正子(あなべ まさこ)である。皇軍勇士の中田正一少佐の夫人として知られる。正子は、明治三十四年(一九〇一年)に生まれる。東京女子大学法律部三年生として、今年三月に卒業した。卒業後、東京女子大学法律部で勤務し、今年十月に、東京女子大学法律部で、女弁護士として初めて誕生した。正子は、皇軍勇士の中田正一少佐の夫人として知られる。正子は、皇軍勇士の中田正一少佐の夫人として知られる。正子は、皇軍勇士の中田正一少佐の夫人として知られる。

御婚約 矢松節
 皇軍勇士の中田正一少佐と、皇軍勇士の中田正一少佐の夫人として知られる。正子は、皇軍勇士の中田正一少佐の夫人として知られる。正子は、皇軍勇士の中田正一少佐の夫人として知られる。

生れ出た婦人弁護士

法廷に美しき異彩 女性友紅三點

抱負も豊かに登場



「女弁護士初めて誕生」の報に、皇軍勇士の夫人も喜びの一人として登場した。彼女の名は、中田正子(あなべ まさこ)である。皇軍勇士の中田正一少佐の夫人として知られる。正子は、明治三十四年(一九〇一年)に生まれる。東京女子大学法律部三年生として、今年三月に卒業した。卒業後、東京女子大学法律部で勤務し、今年十月に、東京女子大学法律部で、女弁護士として初めて誕生した。正子は、皇軍勇士の中田正一少佐の夫人として知られる。正子は、皇軍勇士の中田正一少佐の夫人として知られる。正子は、皇軍勇士の中田正一少佐の夫人として知られる。

1940年(昭和15)年6月16日 東京日日新聞
 「生れ出た婦人弁護士 法廷に美しき異彩女性友紅三點抱負も豊かに登場」

1990年(平成2)年4月15日 明治大学広報
 「弁護士生活50年」

吾が人生雑感

弁護士生活50年

弁護士 中田 正子



昭和十三年十月司法試験の合格を以て、初めて法廷に立ち出ました。その後、天は興業委員一期、参議院議員三期をつとめ、その間に、皇軍勇士の中田正一少佐の夫人として知られる。正子は、皇軍勇士の中田正一少佐の夫人として知られる。正子は、皇軍勇士の中田正一少佐の夫人として知られる。

昭和十三年十月司法試験の合格を以て、初めて法廷に立ち出ました。その後、天は興業委員一期、参議院議員三期をつとめ、その間に、皇軍勇士の中田正一少佐の夫人として知られる。正子は、皇軍勇士の中田正一少佐の夫人として知られる。正子は、皇軍勇士の中田正一少佐の夫人として知られる。

